

芸術  
美術 I

NHK  
高校講座

## 第1回

## 赤・青・黄色

～色彩と人の気持ち～

美術教育監修・執筆

上野行一

世の中にはさまざまな色が存在している。色は見る人のイメージを左右する。色で印象が変わることもしばしば。色と美術の世界が深くかかわっていることは言うまでもない。今回は色彩と人の気持ちという視点から、色彩から受ける印象の違い、周りの色に影響されて色の見え方が変わる錯覚の不思議、色の組み合わせの大切さなどを学ぶ。

学習前  
チェック!

ふだん何気なく見ている色。色の不思議な見え方や性質を学ぶことで、これまでとは違った見方で周りの世界を見ることができる。また、自分の作品表現の幅を広げることができる。

## 色彩から受ける印象

色は私たちの心に働きかけ、さまざまな気分や感情を引き起こす。赤や橙、黄などは暖かさや温もりを感じさせ、青や青緑、青紫などは寒さや冷たさを感じさせる。赤や橙、黄などを暖色、青や青緑、青紫などを寒色と呼ぶのはそのためだ。

しかし、色から受ける印象はいつも同じではない。黄色は明るさや軽快さを感じさせるが、その反面、注意や警戒心を喚起させるので、交通信号や工事現場などで使われている。赤は興奮や強さを感じさせるが、それが明るい気持ちや情熱的な感情を引き起こすこともあれば、逆に怒りや危険などを連想させることもある。色から受ける印象は、それを見る人の心によっても変わるのだ。色には人の気持ちを変えたり、映し出したりする力があるといえる。

## 色の見え方の違い

同じ色でも周りの色に影響されて違う色に見えることがある。赤いネットに入ったみかんの色は、緑のネットに入ったみかんより赤みが強く見える。これは色相の同化が起こるから。ネットの赤い色の影響を受けて、みかんの色が赤の色相に偏って見えるのだ。

オクラや枝豆が緑のネットに入れられているように、私たちの生活を見渡すと同じような効果をもたらす例をいくつも見つけることができる。このような色の見え方の違いに注目して、生活の中の色づかいを工夫したり、作品表現にいかしてみよう。



## 色の組み合わせ

私たちは色などの視覚的な情報から、食べ物の味を9割がたイメージして口に運ぶと言われている。食器や食材の色の組み合わせによって味のイメージが違ってくこともある。

色と私たちの生活は深くかかわっている。効果的な色の組み合わせ方について考えてみよう。

色は「色相」と「明度」と「彩度」で表すことができる。同じ色相の色でも明度や彩度の違いで「淡い」「鮮やか」「鈍い」「暗い」など、感じ方の違う色がある。このような色の感じの違いを「トーン（色調）」という。

色相は違って明度と彩度の近い色を組み合わせるとトーン（色調）が合い、まとまった印象の配色になる。高彩度で低明度な渋いトーン（色調）は、和風のイメージの配色に使われる。逆に低彩度で高明度な淡いトーン（色調）は、一般にパステルトーンと呼ばれる、澄んだ明るい配色になる。色を効果的に使って、生活にいかしてみよう。